

# 御神楽岳前沢左俣

小沼 充範

- 山行年月日:2021年7月21日
- メンバー:小沼充範
- コースタイム:林道6:40～入渓地点7:10～最初の二俣7:30～登山道15:25～御神楽山頂15:50～登山道入口18:30

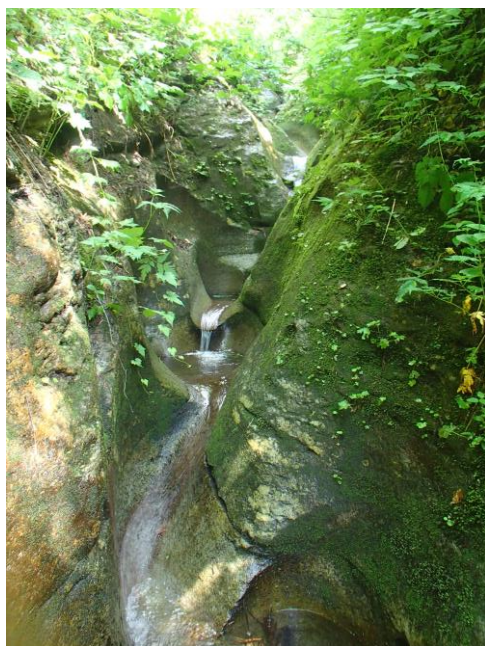
かつて幹衛さんと源一郎さんが行ったムサ沢のパーティーへ参加したかったが、有給休暇をつかい果たし梅雨明けは8月上旬のため7月連休は天気が悪いだらうと予測していた。ところが今年は梅雨明けが早く、ムサ沢のために休暇をとればよかったと後悔する。このため平日、日帰りで前から気になっていた前沢左俣を遡行することにした。

前日の夜、倉谷川と室谷川の合流点近くのアスファルトの広場にテントを張

って泊まる。夜は満天の星空が広がる。

御神楽岳登山道方面と前沢方面の分岐に車を止め6時40分出発。前沢方面の林道を歩く。林道は途中まで車で入れるが、その先は草に覆われ細い道となる。10年前の集中豪雨により林道が被害を受けたのだろう。7時10分、前沢に入渓する。30分進むと二俣となり左俣へ入る。

沢はすぐに小ゴルジュとなり、岩肌の山で囲まれ4m2段の滝が現れる。御神楽らしい雰囲気となり、滝は容易に登ることができる。5m滝を左から越えるとナメ床が続く。左岸には尾根のくびれが近くに見える。樹林の中に平凡な流れがしばらく続く。4m2段滝、ナメを通過し、3m滝を左岸から巻くと、9時、右



前沢左俣上おう穴滝



前沢左俣スダレ滝



**前沢左俣上部2段滝**

岸から 815mからの枝沢が入る。

4m滝を右岸から巻くとショルダーで越えることのできる樋状の小滝となり左岸を巻く。樋状 4m滝を左岸から巻くと、小さな釜をもつ小滝の連続となる。ゴー口滝、4m滝を越えると 10 時 15 分 3mナメ滝にたどり着く。ここから先、いろいろと滝が現れ核心部となる。単独なので無理をせず、登れそうにない滝は巻くことにする。4m滝、4mナメ滝を過ぎると 4 段 15mナメ滝が現れる。再び両側にスラブの山肌が現れ、険しさが増し、尾根上には天然杉が見え、青空が広がる。ラバーソールのフリクションをいかし左側のスラブを登って滝を越える。小滝を左岸から小さく巻くと樋状 15m滝が現れる。巻きは大変そうなので登るしかない。水線に沿って登れるが、落ち口の手掛かりが乏しく、わずかな岩の突起を左手で掴み体を押し上げて這い上



**前沢左俣上部ナメ滝**

がる。左側に大岩のある 3m滝を登ると背後に鍋倉山が見える。

連暴 15m滝を快適に登ると立派な 20 m滝が現れ傾斜が緩くホールドもあり容易に登ることができる。つづく 6m滝は左側のスラブを登る。5m滝を過ぎると左岸から枝沢が入って連暴 20m滝となり楽しく登ることができる。タイコバラ 3m滝を越え、12 時スタレ状 8m滝が現れ右側を登る。10m滝を右から小さく巻くと、12 時 35 分、右岸から枝沢が入り標高 800m付近にいるようである。

右岸からまとめて 3m、2m滝を巻き、樋状 2m滝を登る。小ゴルジュの中にナメと甌穴が発達している。5m滝を過ぎると 8m滝が現れ右岸を巻く。振り返ると五剣谷山、室谷の集落が見て、かなり高度を上げたようである。美しいナメの連続となり、2m滝を越えると 13 時 30 分大きな倒木が横たわる。3 段 6m滝は

右岸の草地から巻いて行く。両側に尾根が手に取るように見え、水量も少なくなり源頭が近いようだ。

3m前後の小滝が続き、小ゴルジュの中に落ち口中央に岩のある2m滝が現れる。二人ならショルダーで越えられそうだが単独であり落ち口の岩が邪魔で登りにくく、強引に這い登る。空身で登りザックを引き上げれば良かった。ナメを過ぎると14時15分、右岸から枝沢が入り標高1080m付近に着いたようである。水量が乏しくなっても延々とナメが続き、水流が尽き、わずかな藪漕ぎで、15時25分、登山道にとびだす。せっかくなので御神楽岳山頂へ行くことにする。

御神楽岳山頂15時50分着。久しぶりの山頂である。御神楽沢周囲のスラブ、猪ヶ森山、日尊の倉山、美しい御神楽岳を望むことのできる太郎布の集落が見

える。御神楽の名前を知ったのは6才のとき、太郎布の親戚の家へ泊まりに行ったときである。周囲は夏雲がわき、雷が鳴りだす。デポした沢用具を回収して登山道を下る。

気温が高く、汗がダラダラ流れる。途中に水場があるのは助かる。ヒグラシの鳴き声を聞いても涼しさを感じられない暑さである。18時30分、登山口にたどり着く。林道を歩き、19時、車を置いた前沢との分岐にたどり着く。衣服は汗でびしょ濡れである。急いで車に乗り込み19時30分で受付終了の御神楽荘の風呂に入ることができた。

前沢左俣は次から次へと滝が現れ変化のある沢で滝はほとんどが登れるものばかりであり、上部は長いナメが発達している。鞍掛沢右俣同様、御神楽岳入門向けの沢と言えらるう。



前沢左俣中間部3段滝



連瀑帯より下流を見る